

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 6 号（8 月）

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 ＜平年比（前年比）＞	作物名	病虫害名	予想発生量 ＜平年比（前年比）＞		
イネ	いもち病（穂いもち）	少（やや少）	チャ	チャノコカクモンハマキ	山城： 多 （多） 丹波： 多 （多） 丹後： 多 （やや多）		
	紋枯病	並（多）		チャノホソガ	山城：並（並） 丹波：やや少（やや少） 丹後：やや少（少）		
	セジロウンカ	やや少（やや多）			カンザワハダニ	山城：やや少（少） 丹波：やや少（少） 丹後：並（やや少）	
	トビイロウンカ	並（並）				チャノミドリヒメヨコシイ	山城：やや少（並） 丹波：並（多） 丹後：やや少（少）
	ツマグロヨコバイ	並（やや多）		チャノキイロアザミウマ			山城：やや少（やや少） 丹波：並（並） 丹後：やや少（少）
	斑点米カメムシ類	多 （並）					
	コブノメイガ	やや多 （やや多）					
黒大豆	吸実性カメムシ類	やや多 （やや少）					
	サヤムシガ類	並（並）					
	ハスモンヨトウ	並（並）					
	ハダニ類	並（並）					
アズキ	ハスモンヨトウ	並（並）	果菜類	うどんこ病	並（並）		
ナシ	ハダニ類	並（並）		ハモグリバエ類	並（並）		
	黒斑病	やや多 （並）		アザミウマ類	やや多 （並）		
	ハダニ類	やや多 （やや多）	キュウリ	べと病	やや少（やや多）		
ブドウ	べと病	やや少（やや少）		褐斑病	並（やや少）		
カキ	炭疽病	並（並）		炭疽病	やや多 （やや少）		
	うどんこ病	やや少（並）		斑点細菌病	並（並）		
カンキツ	ハダニ類	並（並）	ネギ	ネギアザミウマ	やや多 （多）		
果樹全般	カメムシ類	やや多 （やや多）		ネギハモグリバエ	やや少（やや少）		
チャ	炭疽病	山城：並（並） 丹波： やや多 （やや多） 丹後：並（少）		シロイチモジヨトウ	多 （やや多）		
	もち病	山城：並（並） 丹波：並（並） 丹後：並（並）	野菜全般	ハダニ類	並（並）		
				ハスモンヨトウ	並（多）		

※平年とは過去 10 年の平均である。

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	14
参考	
Ⅰ 近畿地方の気象 1 か月予報	17
Ⅱ 用語の定義	17

農作物病虫害情報
サービスホームページ
<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

病虫害予察情報等メールサービス
<https://www.pref.kyoto.jp/bojoshou/mailservice/mailservice.html>

予報本文

イ ネ

1 いもち病（穂いもち）

予報内容 発生量：平年比少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、葉いもちの発生量は、山城では発生を認めず（平年比やや少ない（－））、南丹では平年比やや少なく（－）、中丹では平年並、丹後では発生を認めなかった（平年並）。府全体では平年比やや少ない発生であった（－）。
- （２） いもち病発生予察システム（BLASTAM）では、6月から7月上旬にかけて府全域で感染好適条件が確認された。
- （３） 向こう1か月の気温は平年比高く（－）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの重要な伝染源となる。
- （２） 穂ばらみ期から出穂後約3週間の間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- （３） コシヒカリなど発病しやすい品種や、すでに葉いもちが多発している田、山間部などでは特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
- （４） 粒剤は種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- （５） カメムシとの同時防除剤を使用する場合は、出穂直前から穂揃期に散布する。

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- （２） 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 分けつ期ごろに水際の葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。
- （２） 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。
- （３） 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように散布する。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。
- （４） 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- （５） 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。

3 セジロウンカ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、本田見取り調査での発生量は平年比やや少なく、本田すくい取り調査での発生量も平年比やや少ない（－）。
- （２） セジロウンカの予察灯（60W）への誘殺数は、京田辺市及び京丹後市で平年並、亀岡市で平年比やや多い。府全体では、平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 海外からの飛来害虫である。
- （２） 成幼虫とも吸汁加害するので、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

4 トビイロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１） 7月16日現在、予察灯（60W）への誘殺を認めていない（平年並）。
- （２） 7月中旬の巡回調査では、発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 海外からの飛来害虫であり、今後発表される病害虫発生予察情報に注意する。
- （２） 多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- （３） 株当たり5頭以上もしくは短翅虫を10株当たり2頭以上認めた場合は、直ちに防除する。この場合、薬剤が株元に十分かかるよう散布する。

5 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、発生量は本田見取り調査では平年並、本田すくい取り調査でも平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 穂ばらみ期から出穂期に高密度であると吸汁による被害が生じる。また、排泄物により、すす病が発生する。

6 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年比多い（前年並）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、本田での発生量は平年比やや多く（+）、畦畔雑草では平年並。
- （２） アカスジカスミカメの予察灯（60W）への誘殺数は、京田辺市及び京丹後市で平年比やや多く（+）、亀岡市で平年比多い（+）。府全体では、平年比やや多い（+）。
- （３） アカヒゲホソミドリカスミカメの予察灯（60W）への誘殺数は、京田辺市及び京丹後市で平年並、亀岡市で平年比やや多い（+）。府全体では、平年並。
- （４） イネカメムシの予察灯（60W）への誘殺数は、京田辺市及び京丹後市で平年比やや多く（+）、亀岡市で平年並。府全体では、平年比やや多い（+）。
- （５） 向こう1か月の気温は平年比高い（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- （２） 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- （３） 薬剤防除を行う場合、粉剤や液剤では穂揃期と傾穂期の2回防除（共同、一斉）が有効である。また、粒剤では種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- （４） ミナミアオカメムシは、他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。
- （５） 近年、イネカメムシの発生量が増加している。他の斑点米カメムシ類と異なり、出穂期に水稻の籾の基部を吸汁して不稔籾を生じさせ、穂が充実せず直立する。そのため、イネカメムシが多発している場合は、穂揃期以降ではなく出穂期から防除することが重要である。また、穂揃期以降に加害されると籾の基部が変色した斑点米を生じ、等級格下げの原因となる。

詳細は、令和8年7月23日付け「病害虫発生予察注意報第2号」
https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/chuui2026_02.pdf
を参照のこと。



7 コブノメイガ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、南丹及び中丹では発生を認めず（平年並）、山城及び丹後では平年比やや多い発生（＋）。府全体では平年比やや多い発生であった。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 海外からの飛来害虫である。
（２） 晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネに集中飛来するので注意する。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp14を参照

黒大豆

1 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、巡回調査において発生を認めていない（平年並）。
（２） 7月第3半旬現在、予察灯(60W)への誘殺数について、アオクサカメムシは、京田辺市、亀岡市及び京丹後市で誘殺を認めていない（平年並）。イチモンジカメムシは、京田辺市及び亀岡市で平年並、京丹後市で平年比やや多い（＋）。ミナミアオカメムシは、京田辺市で平年比やや少なく（－）、亀岡市で平年比多く（＋）、京丹後市で誘殺を認めていない（平年並）。
（３） 7月第3半旬現在、予察灯(BL)への誘殺数について、イチモンジカメムシは、京田辺市で誘殺を認めず（例年比やや少ない（－））、亀岡市で誘殺を認めず（平年比やや少なく（－））、京丹後市で例年比多い（＋）。ミナミアオカメムシは、京田辺市で例年並、亀岡市及び京丹後市で誘殺を認めていない（平年並）。
（４） 7月第3半旬現在、イチモンジカメムシのフェロモントラップへの誘殺数は、亀岡市で例年比やや多い（＋）。
（５） 7月第3半旬現在、ホソヘリカメムシのフェロモントラップへの誘殺数は、京田辺市で例年比やや多く（＋）、亀岡市で平年比多く（＋）、京丹後市で例年比やや多い（＋）。
（６） 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 吸実性カメムシ類には、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシ等がいる。
（２） クズやレンゲ等の雑草が自生する場所は好適な発生地となりやすく、このような場所が周辺にある場合は被害を受けやすい。
（３） 開花期直前から着莢期に成虫が飛来し、吸汁や産卵をする。成虫は好適な餌がある場所を求めて移動するが、幼虫はそのまま滞在し、黄熟期まで加害し続けるため、薬剤散布は着莢期から10日間隔で2～3回実施する。

詳細は、令和8年7月23日付け「防除所ニュース令和8年第4号」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2026_04.pdf



2 サヤムシガ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１） 7月中旬現在、発生量は平年並。
（２） 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年3～4回発生する。ダイズでは、7月下旬～8月中旬に第2世代幼虫が新芽を、8月下旬～9月に第3世代幼虫が莢を加害する。第2世代の被害が大きい。

3 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、巡回調査において発生を認めていない（例年並）。
- (2) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市及び亀岡市で平年比少ない（－）。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生は10月下旬頃まで続く。発生量は9月上中旬に最も多くなる。
- (2) 成虫は葉裏に数百個の卵を塊状に産みつける。卵塊は綿毛状のもので覆われ、卵粒は見えにくくなっている。ふ化した幼虫は若齢期（1～2齢）を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透けて見えることから白変葉と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (3) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、ほ場を見回り白変葉の早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除くとともに、薬剤散布を行い、初期防除に努める。

4 ハダニ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天で高温乾燥が続くと多発しやすくなる。特に7～8月の発生が多い。
- (2) 増殖が速く、高密度になってからでは防除効果が劣るので、初期防除に努める。

アズキ

1 ハスモンヨトウ

黒大豆の項参照。なお、ダイズに比べ白変葉が見つけにくいので注意する。

2 ハダニ類

黒大豆の項参照。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp14を参照

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多かった（＋）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 収穫期に降雨が多い年は、袋掛けした果実でも、袋の口から雨水とともに分生子が流れ込み、発病することがある。
- (2) 夏から秋にかけての葉での発生は、枝病斑や短果枝の病芽の発生を招き、翌年の感染源になる。落葉した発病葉も翌年の感染源になるので、防除を徹底する。特に、若い葉や枝のある徒長枝が発病しやすいので、薬剤散布は棚上の徒長枝にも薬液が掛かるように丁寧に行う。

2 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（－）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は22～25℃である。雨が多く、気温が低めに経過する冷夏の年は多発しやすい。

3 カキ 炭疽病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多いので害虫防除を徹底する。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（－）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は15～25℃である。8月の高温時には病勢が治まるが、冷夏の年は分生子の飛散が続き、発病が続く。
- (2) 8月下旬頃から発病した葉の裏側には、白い菌叢が見られる。

5 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、ナシ及びカキで被害果の発生を認めていない（平年並）。
- (2) 7月第3半旬現在、予察灯(BL)へのチャバネアオカメムシの誘殺数は京田辺市で例年比やや多く（＋）、亀岡市で平年並、京丹後市で例年並。
- (3) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへのチャバネアオカメムシの誘殺数は京田辺市、亀岡市及び京丹後市で平年比やや多い（＋）。
- (4) 7月第3半旬現在、予察灯(BL)へのクサギカメムシの誘殺数は京田辺市で例年並、亀岡市で平年並、京丹後市で例年比やや多い（＋）。
- (5) 7月第3半旬現在、予察灯(BL)へのツヤアオカメムシの誘殺数は京田辺市及び京丹後市で例年並、亀岡市で平年並。
- (6) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量及び日照時間は平年並と予想

されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カキの被害は7月中旬以降に発生することが多い。8月中下旬までに加害された果実の多くは落果する。
- (2) カメムシ類は局地的に発生し被害をもたらすこともあるので、園内外の成虫発生状況をこまめに観察し、発生を認めたら早めに防除すること。特に、山林等の隣接園では注意が必要となる。
- (3) 収穫期に近い果樹は、他の病虫害防除も含めて、農薬の使用にあたっては使用基準(特に収穫前日数)を厳守する。
- (4) 合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類が多発する恐れがあるので避ける。

詳細は、令和8年7月23日付け「防除所ニュース令和8年第5号」
https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2026_05.pdf
を参照のこと。



6 ナシ・カンキツ ハダニ類

予報内容	発生量：ナシ	平年比やや多い(前年比やや多い)
	カンキツ	平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はナシでは平年比やや多く(+)、カンキツで平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天が続くと多発しやすいので、園をよく見回り、発生を認めた場合には薬剤散布を行う。
- (2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤は連用しない。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp14を参照

チャ

1 炭疽病

予報内容	発生量：山城	平年並	(前年並)
	丹波	平年比やや多い	(前年比やや多い)
	丹後	平年並	(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城及び丹後で平年並、丹波では平年比やや多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
- (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽伸育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- (3) 防除適期は、夏秋茶芽の第1～2葉展葉期である。

2 もち病

予報内容	発生量：山城	平年並(前年並)
	丹波	平年並(前年並)
	丹後	平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、山城、丹波及び丹後で発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、新芽に感染する。
- (2) 山間地で発生が多い。
- (3) 防除適期は、新芽伸育期である。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容	発生量：山城	平年比多い（前年比多い）
	丹波	平年比多い（前年比多い）
	丹後	平年比多い（前年比やや多い）
発生時期：次世代幼虫ふ化期		
	山城	7月第5半旬～8月第1半旬（平年比早い）
	丹波	8月第1半旬～8月第3半旬（例年比やや早い）
	丹後	7月第5半旬～8月第1半旬（平年比早い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城、丹波及び丹後で平年比多い（+）。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市及び京丹後市で平年並、綾部市で例年比やや多い（+）。
- (3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市及び京丹後市で平年比早く、綾部市で例年比やや早い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、年4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。
- (3) ジアミド系及びIGR剤などの薬剤の効果が低下している地域があるので、これらの薬剤の効果が低いと感じられる場合は、同系統薬剤の連用を避ける。

詳細は、令和8年6月24日付け「防除所ニュース第3号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2026_03.pdf



4 チャノホソガ

予報内容	発生量：山城	平年並	（前年並）
	丹波	平年比やや少ない	（前年比やや少ない）
	丹後	平年比やや少ない	（前年比やや少ない）
発生時期：次世代幼虫ふ化期			
	山城	8月第4半旬～8月第5半旬	（平年並）
	丹波	8月第5半旬～9月第1半旬	（例年比やや遅い）
	丹後	8月第5半旬～9月第1半旬	（平年比早い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、山城で平年並、丹波で発生を認めず（平年比やや少ない（-））、丹後では発生を認めていない（平年並）。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年並、綾部市で例年比少なく（-）、京丹後市では平年並。
- (3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市で平年並、綾部市で例年比やや遅い、京丹後市で平年比早い。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、5回世代を繰り返す。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 弧状仕立て園の防除適期は、夏秋茶芽の第2葉開葉期である。

5 カンザワハダニ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない（前年比少ない）
	丹波	平年比やや少ない（前年比少ない）
	丹後	平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城及び丹波で平年比やや少なく（－）、丹後で平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 晴天が続くと多発しやすいので注意する。
- (2) 繁殖力は10～30℃の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない（前年並）
	丹波	平年並（前年比多い）
	丹後	平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城及び丹後で平年比やや少なく（－）、丹波で平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に新梢を加害し、新芽の被害症状は黄化、萎縮、葉先の褐変、黒変等である。
- (2) 防除適期は、新芽伸育期である。
- (3) ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する効果が低下している地域があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

7 チャノキイロアザミウマ

予報内容	発生量：山城	平年比やや少ない（前年比やや少ない）
	丹波	平年並（前年並）
	丹後	平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は山城で平年比少なく（－）、丹波で平年並、丹後では平年比やや少ない（－）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋茶芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高い場合は注意する。
- (3) 発生の多い園では、夏秋茶芽の萌芽期と第1葉開葉期に2回防除を行うと効果が高い。
- (4) ネオニコチノイド系、ピレスロイド系などの薬剤に対する効果が低下している地域があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

※今後注意すべきその他の病虫害等は p 15 を参照

野菜

1 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１） 7 月中旬現在、発生量はキュウリで平年比やや多く（＋）、ナスでは平年並。
- （２） 向こう 1 か月の気温は平年比高く（－）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 気温 20℃前後、比較的低い湿度で多発する。
- （２） 施設栽培で発生しやすい。
- （３） 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。
- （４） トウガラシ類では、ハダニ類による被害との判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- （５） 菌糸が組織内で増殖するので、薬液が十分付着するよう丁寧に散布する。

2 キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

- （１） 7 月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）。
- （２） 向こう 1 か月の気温は平年比高く（－）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 気温 20～25℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- （２） 肥切れしたり草勢が衰えると発生が多くなるので、肥培管理に注意する。

3 キュウリ 褐斑病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１） 7 月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- （２） 向こう 1 か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１） 発病適温は 25～30℃で、高温多湿条件下で多発する。
- （２） 一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。
- （３） 施設栽培では換気を十分に行い、かん水も過多にならないようにし、高温多湿に注意する。
- （４） 窒素質肥料の過多は耐病性を低下させ、一方、肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- （５） 被害葉上の胞子は乾燥状態では相当長く生存するので、被害葉は土中深く埋めるか焼却処分する。

4 キュウリ 炭疽病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１） 7 月中旬現在、発生量は平年比多い（＋）。
- （２） 向こう 1 か月の気温は平年比高く（－）、降水量及び日照時間は平年並と予想

されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温 22～24℃で降雨が続くと伝染、まん延しやすい。発病後の防除は効果が劣るので、予防、早期防除に重点を置く。
- (2) 種子伝染するほか、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。
- (3) 窒素質肥料の多用は発病を助長するので注意する。

5 キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は平年比やや多い（＋）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、果実及び葉の気孔や傷口等から入って発病するが多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 多湿が発病を助長するので、施設では換気を十分に行う。
- (4) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

6 野菜全般 ハダニ類（チャノホコリダニを含む）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はキュウリで発生を認めず（平年比やや少ない）、ナスで平年比やや多い。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (4) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除を行う。
- (5) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

7 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はキュウリ及びナスで平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) トマトハモグリバエは、8月以降多発する傾向がある。
- (2) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- (3) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (4) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量はキュウリでは平年並、ナスでは平年比多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマ等ウイルス病を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では、乾燥が続くと特に多発しやすいので、注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

9 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は小株で平年比やや多く、大株では平年比多い(+)。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ネギアザミウマは、年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種は、ネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギアザミウマに対する薬剤殺虫効果（2021年）」

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negiazamiumakanjyusei2021.pdf>

技術資料「ネギえそ条斑病防除マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_iysv-manual_20200124-forhp.pdf

技術資料「ネギ栽培における赤色系防虫ネット技術マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_redcolor-net_manual.pdf



10 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は小株では発生を認めず（平年並）、大株では発生を認めていない（平年比やや少ない（-））。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 被害葉及び収穫残さが発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、

表面をビニルで被覆する等適切に処分する。

- (3) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギハモグリバエ防除マニュアル（2025年）」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negihamoguribae-anual_202502.pdf



1 1 ネギ シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量：平年比多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、発生量は小株で平年比多く、大株で例年比多い（+）。
(2) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市で例年比多く（+）、亀岡市で例年並、京丹後市で例年比やや少ない（-）。
(3) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
(2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
(3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「シロイチモジヨトウ防除における化学農薬使用回数の削減マニュアル（2025年）」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/shiroichimojiyotou-manual_202502.pdf

令和8年7月23日付け「病虫害発生予察注意報第3号」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/chuui2026_03.pdf



1 2 野菜全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年並（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 7月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市及び亀岡市で平年比少ない（-）。
(2) 府内のエビイモほ場で発生を認めている（+）。
(3) 向こう1か月の気温は平年比高く（+）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

黒大豆の項参照。

※今後注意すべきその他の病虫害等はp15を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量等を予想していない病害虫について、発生生態及び注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、露や濡れ葉状態の時にはほ場に入らないなど注意する。

2 ニカメイガ（ニカメイチュウ）

- (1) 4月第1半旬～7月第3半旬までのフェロモントラップ誘殺数では、京田辺市及び京丹後市で例年並、亀岡市で例年比少ない。
- (2) 年2世代発生し、第1世代幼虫の発蛾最盛期は6月上～中旬、第2世代幼虫は8月中旬である。被害の主体は第2世代幼虫であるため、多発時には防除する。
- (3) もち米品種や茎の太い品種の作付け田では発生しやすくなる。
- (4) 野菜・チャ・イチジク等の栽培で稲わらを使用する地域では、発生しやすいので注意する。

3 イネアオムシ（フタオビコヤガ）

- (1) 山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、また、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

アズキ

1 アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類、オオタバコガ

発生すると被害が大きく、莢に食入すると防除が難しいので、開花始めから7～10日間隔で少なくとも2回は防除を行う。

モモ・ウメ

1 クビアカツヤカミキリ

サクラ、ウメ、モモ、スモモ等、主にバラ科の樹木を加害する侵入害虫で、京都府では令和6年7月に初めて発生が確認された。また、令和7年7月にウメの生産園地での発生が確認されていることから、今後さらに被害が拡大する恐れがある。

詳細は令和7年7月22日付け「発生予察特殊報第1号」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2025_01.pdf
を参照のこと。



2 ウメ輪紋病

ウイルスによる病害で、アブラムシによって媒介される。宿主植物は、主に Prunus 属の果樹（ウメ、アンズ、スモモ、モモ、ネクタリン、アーモンド等）で、感染すると葉に退緑斑点（薄い緑色の部分がでる症状）や輪紋（ドーナツ状の模様がでる症状）などが生じる。京都府では令和8年6月に初めて発生が確認された。

詳細は令和8年7月13日付け「発生予察特殊報第1号」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2026_01.pdf
を参照のこと。



チャ

1 チャトゲコナジラミ

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 トマトキバガ

主にトマト等のナス科植物を食害する。幼虫が葉を薄皮残して食害し、果実の表面を食害する。施設では目合い 0.4 mm 以下の防虫ネットで侵入を防ぎ、剪定残渣はビニル袋で密閉する等適切に処分する。発生を認めたら、本虫に登録のある薬剤を散布する。

詳細は、令和 7 年 6 月 13 日付け「防除所ニュース第 4 号」を参照

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2025_04.pdf



2 キュウリ退緑黄化病、キュウリ黄化病、キュウリ黄化えそ病、CABYV

いずれもウイルスによる病害で、退緑黄化病及び黄化病では葉に退緑及び黄化症状を示して減収し、黄化えそ病では葉にモザイク、えそ斑点及び黄化等の症状を、果実にモザイク斑紋や奇形を生じて減収し、CABYV（和名未定）では中位葉の半分程度に退緑及び黄化症状が発生して減収する。いずれもキュウリ以外のウリ科作物でも発生する。媒介は、退緑黄化病ではタバココナジラミにより、黄化病ではオンシツコナジラミにより、黄化えそ病ではミナミキイロアザミウマによる。CABYV の媒介虫は不明であるが、海外ではアブラムシ類とされている。

詳細は下記の特報を参照。

キュウリ退緑黄化病

令和 5 年 12 月 26 日付け「発生予察特報第 2 号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2023_02.pdf



キュウリ黄化病

令和 6 年 4 月 24 日付け「発生予察特報第 2 号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_02.pdf



キュウリ黄化えそ病

令和 6 年 9 月 4 日付け「発生予察特報第 4 号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_04.pdf



CABYV

令和 6 年 2 月 1 日付け「発生予察特報第 1 号」。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_01.pdf



3 サツマイモ基腐病

最近府内で確認された病害で、本ぽでは地際部が黒くなり、塊根はなり首から腐敗し、降雨等により周辺の株に広がっていく。本病の発生を確認したら、罹病株の抜き取りと、薬剤防除が必要である。

詳細は令和 6 年 5 月 24 日付け「発生予察特報第 3 号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2024_03.pdf



4 トマト黄化葉巻病及びトマト黄化病

トマト黄化葉巻病は、黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気で、症状は、先端部の葉が内側に巻く、葉縁が黄化、株の萎縮等で、タバココナジラミによって媒介される。

トマト黄化病は、葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、生理障害の苦土（マグネシウム）欠乏の症状に類似し、タバココナジラミ及びオンシツコナジラミによって媒介される。

詳細は令和3年8月6日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu2021_01.pdf



5 タバココナジラミ

タバココナジラミは世界中に分布し、多くのバイオタイプが存在する。中でもバイオタイプQは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、防虫ネットや黄色粘着板及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

詳細は、技術資料「施設トマトにおけるタバココナジラミ防除マニュアル（2025年）」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tobaccowhitefly-manual_202502.pdf

6 タバコガ類（オオタバコガ、タバコガ）

発生が多くなると、大きな被害になるので注意する。特にナス、トマト等の果実に食入すると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、食入前の防除に留意する。

7 カメムシ類（トマト、ナス、トウガラシ、インゲン、エダマメ等）

周囲に雑草地やダイズなどカメムシ類の発生しやすいほ場があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。

特にミナミアオカメムシは、水稻の斑点米の原因になるとともに、果菜類も加害するので注意する。

参 考

I 近畿地方の気象の1か月予報

(7月18日から8月17日までの天候見通し)

令和8年7月16日

大阪管区气象台発表

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	1 0	2 0	7 0
降 水 量	3 0	4 0	3 0
日 照 時 間	3 0	3 0	4 0

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第1半旬 第2半旬 第3半旬 第4半旬 第5半旬 第6半旬
各月の 1～5日 6～10日 11～15日 16～20日 21～25日 26～最終日

2 発生量 ―― 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 ―― 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合(5～9年)は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・ 京 都 乙 訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山 城 北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山 城 南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南 丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中 丹 東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中 丹 西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹 後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－ 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること －